

日本古代都市の実像とその特質

佐藤 信

SATO Makoto

東京大学大学院教授



1—日本とアジアの古代都市

かつては、日本古代史の研究において「日本の古代には都市はなかった」と言われた時代もあった。たとえば、2010年に遷都1300周年を迎える奈良の都「平城京」(710～784年)も、次の長岡京(784～794年)・平安京(794年～)へと遷都したのち、わずか数10年後には東大寺・興福寺の門前周辺の奈良町を除いて、そのほとんどが水田の広がる田園地帯となっていたのであった。このような「幻の都市」は、「都市」と呼ぶのに値しないと考えられたのである。そして、王侯の宿営地的な性格をも

って上から設定されたに過ぎず、都市としての経済的基盤や自立した都市民がみられないといった都市としての未熟さが強調された。

しかし、平城宮跡が1964年頃から奈良文化財研究所によって継続的に発掘調査され、また平城京跡でも同研究所や奈良県・奈良市・大和郡山市によって精密な発掘調査が行われるようになった。そして、その成果が積み上がっていくとともに、古代都市の具体的な実像が明らかになっていった。8世紀の平城京の遺跡ほど、精密な発掘調査による知見が蓄積されている古代都市の例は、



写真1—藤原京の復元模型(奈良県橿原市教育委員会蔵)



写真2—法隆寺五重塔

世界的にも珍しいといっただろう。その結果、多くの人口が集積し、社会的な諸階層が存在し、流通も大規模に展開した都市の様相が明らかになったのである。

こうして、西欧中心の立場で形成された都市概念を日本の古代都市に当てはめるのではなく、アジア的な古代都市の実像を、都市性・都市的要素という観点から見直す作業が進められることになった。政治的に上から設定された都市としての未熟さも、古代都市のアジア的な特徴の一つとしてとらえ、客観的に都市の様相を明らかにすることがめざされるようになったのである。

2—藤原京と古代都市

藤原京(694～710年)は、幅広の直線道路が基盤の目のように東西・南北に走る条坊制をもち、その中央に藤原宮を配置していた。条坊道路には、奈良盆地に7世紀初には営まれていた南北の中ツ道・下ツ道や東西の横大路・山田道などの幹線直線道路が取り込まれた。そして京域内の、北に耳成山、東に香具山、西に畝傍山の三山が位置する中心部に藤原宮が営まれた。藤原京は、天武天皇の時代に造営がはじめられ、次の持統天皇の時代に完成して遷都が行われた。

それまで大王が住み、倭の王権の中心拠点となっていたのは、飛鳥の諸地域に営まれた「大王宮」であった。大王宮は、一代ごとに新大王の王宮へ移転し、一代の間に遷都することもあった。大王は、住む大王宮によって「〇〇宮に天の下治めたまひスメラミコト」のように呼ばれた。そして、有力な王族や中央豪族たちは、大王の大王宮とは別に自分たちの皇子宮や邸宅を営んでいた。たとえば、厩戸王(聖徳太子)が推古天皇の飛鳥の大王宮から離れて斑鳩宮(今の法隆寺)を営んだり、蘇我氏が甘樫丘に立派な大邸宅を営んだことが

知られている。

これに対して、藤原京では、天皇の住む藤原宮を中心として広大な京域を設けた。そして条坊制の街路で区画された京の街区に宅地を班給して、王族や中央豪族たちも天皇の膝元に集住させ、一代の天皇のみでなく永続する都を作り上げたのであった。672年の壬申の乱に勝利した天武天皇は、敗れた近江朝廷側に立った有力な王族や中央豪族たちに対して、カリスマ的な権力を振るえるようになった。そして、専制的・中央集権的な権威と権力をもつ天皇制を実現するとともに、藤原京の造営をはじめたものといえよう。藤原京には、大官大寺・本薬師寺・川原寺・飛鳥寺などの国家的寺院をはじめ氏族寺院などが七堂伽藍(寺院の主要な7つの建物)の偉容を誇り、都市の荘厳が図られた。

藤原京では、中国の都城とは異なり、四辺を羅城の城壁で取り囲むことはなかった。朝鮮半島の高句麗の平壤や百済の扶余などでは京を囲む羅城が知られており、高句麗・百済・新羅の都城は近接する古代朝鮮式山城とセットで営まれているが、そうしたあり方とは異なることも指摘できる。

藤原宮は、天皇の居所である内裏と、政務・儀礼の場である大極殿・朝堂院と、大宝令(701年～)で二官八省の官僚制が定められることになる太政官以下の官庁群が存在した。今日で言うと、皇居と国会議事堂と霞ヶ関の官庁街が取り込まれていたことになる。とくに、はじめて大極殿・朝堂院の建物に、礎石の上に柱を立てて屋根に瓦を葺いた大陸風の最新の建築技法が採り入れられた。それまでの大王宮では「飛鳥板蓋宮」のように瓦葺きの礎石建物はなかなか実現しなかったのが、ようやく整えられたのだった。もっとも、天皇の住居である内裏については、藤原宮ののちの平城宮・平安京にいたるまで、伝統的な掘立柱建物の技法で建てられ続けたのであった。

ところで、この藤原京が、中国の儒教の古典である『周礼』考工記が記すところの皇帝の居所としての都城の理念型に、そっくり当てはまる形をもつことが明らかになってきた。方形の羅城に取り囲まれ、東西・南北の大規模道路に区画された王城都市の中心に王宮を置き(「中央宮闕型」)、北に市場、南に社稷(祭祀場)を配するというのが、儒教の首都理念であった。羅城はもたないものの、藤原京のプランは、まさにそれを実現した姿を示している。実は、本家の中国においても、とくに南北朝時代以降は、北方民族進出の影響を受けて、京域の中央ではなく北端に王城が位置する「北闕型」の都城



■写真3—平城宮跡空撮

が営まれるようになっており、『周礼』考工記にみえる理念型はなかなか実現していなかったのである。唐の都の長安も洛陽も、「北闕型」の都城であった。中国ではなかなか実現できなかった儒教の理念的な都城の姿が、日本列島において藤原京として実現したことは、興味深い。

3—平城京の特徴

藤原京を離れて奈良盆地の北辺の四神相応(四神に相応した最も貴い地相)の地に新しく営まれた平城京は、「中央宮闕型」の藤原京とは違い、宮が京の北端に位置する長安のような「北闕型」の都市プランを採用している(左京の東側北部に外京の京城が取り付く)。この変化の原因を、702年に約30年ぶりに唐に渡った遣唐使が帰国してきたことを指摘する説もあるが、唐の長安などの様子は、7世紀代の遣唐使たちもすでに知っていたはずである。古代都市としての基本的な性格は藤原京と変わらないが、古くから飛鳥・藤原の地に根を張っていた中央豪族たちのしがらみを切り離し、それまでの氏族制・氏姓制を離れて新しい律令制的な官僚制を築く上で、新しい都への遷都が求められたのであった。

平城京は、中世以降に都市として続いた興福寺・東大寺周辺の奈良町を除いた田園地帯にその遺跡がよく残されてきた。そして、世界的にも誇れる精密な発掘調査の成果によって、8世紀の古代都市の実像が見えてきた



■写真4—復元された平城宮の東院庭園

のである。史料にみられる貴族や下級官人たちの住まいや、発掘調査成果によって知られた街区の様子からは、京城において階層性をもつ都市構造が指摘できる。もともと藤原京でも皇族・貴族や官人たちに宅地を班給したのであったが、その班給のあり方は、位階に応じて上に広く下に狭いという土地面積に格差をつけたものであった。

平城京でも宅地には広狭があり、貴族たちは、大路に取り囲まれた区画を小路で16に細分した一街区(坪)を占めたり、左京三条二坊の長屋王邸宅に至っては、4坪分を占める広大な敷地をもっていた。その一方、下級官人たちは、1/32坪とか1/64坪といった小面積の敷地に、数棟の掘立柱建物と井戸などをもつに過ぎなかった。また、官人の勤務先となる京北辺の平城宮に近い五条以北の地には大面積の貴族の邸宅が並んでおり、八条・九条といったはずれの地に下級官人たちの宅地が多く位置したことも知られた。大路に門を開くことができるのは三位以上の上級貴族に限られるという制度があるように、邸宅・宅地の規模・構造には、位階に応じた格差が刻印されていたのである。

平城宮の構造も、藤原宮と基本的には変わらないが、大極殿・朝堂院地区が中央区(第一次)と東区(第二次)とに二つ営まれ、東側に東院の張り出し部が存在することなどは、異なるところである。

平城京の朱雀大路は、藤原京よりも格段と大規模な幅74mの規模をもつ。また、やはり元興寺・大安寺・薬師寺・興福寺・東大寺・西大寺など国家的な寺院の七堂伽藍や平城宮の宮殿建物の偉容によって、荘厳されていた。宮都は、外国使節に対して天皇の徳を示すためにも立派に荘厳されなくてはならなかったのである。国内

向けにも、郡司に任命される儀礼で平城宮を訪れる地方豪族や、調庸などの貢進物を都まで運んでくる諸国の民衆たちに対して、平城宮・平城京の荘厳を見せつけることは、国家の精神的な全国支配のためにも必要なことであった。立派な宮都は、いわば支配の道具でもあったのである。

平城宮内には東院庭園などの園池が営まれているが、平城京城にも、離宮の性格が指摘される左京三条二坊宮跡庭園だけでなく、貴族の邸宅に営まれた園池が多く見つかっている。古代には、周囲に自然景観が豊富に広がっていたともみられるが、都市生活が行われるようになって、改めて白砂青松の自然景観を宅地内に小規模に再現し、潤いを得ることが求められるようになったといえよう。

4—古代都市の展開

平城京は、上から政治的に設定された都市であり、都市としての経済的・社会的な基盤がなかったゆえに、長岡京遷都・平安京遷都後、早々に田地化していったといえる。しかし、奈良時代には、10万人と推定される社会的諸階層の人々が生活し、その生活を支える流通経済も大規模に展開していたという都市の様相が明らかになってきている。古代国家は、律令制度のもとで国設の市場(東市・西市)で価格統制を行いつつ都市内流通を掌握しようとしたが、いったん都市が自律的な展開をみせはじめると、需給関係に応じて物価は変動するし、8世紀後半の物価騰貴を押さえることはできず、国家による流通統制は破綻していったのだ。『万葉集』の歌や『日本霊異記』の仏教説話などによれば、市では、律令の規定からはずれて粗悪品・偽物や盗品の売買が行われることもあった。都市が存在して自律的な流通の動きがある以上、国家がそれを統制しきれるものではなかった。

また、農村のような共同体的な関係を離れた個別的な都市民が大量に平城京に存在するようになることも、都市の自律的な展開といえよう。こうした都市民には、農村から都市に流入した貧窮民や社会的弱者などもふくまれる。

行基は、こうした都市民たちを対象に、社会事業・救済事業を行いながら仏教を広めた僧侶であった。律令の制度では、僧侶には寺院内で国家のために仏教を修めることが求められていたが、行基のように、都市的な場を背景として社会的な仏教活動を行う僧侶が出現することも、自然の動きともいえよう。律令国家は、はじめ



■写真5—「千年の都」となった平安京・京都

行基とその弟子たちの集団を弾圧するが、平城京周辺では行基のもとにすぐに1,000人もの信者たちが集まるという状況を押さえつけることはできなかった。結局、大仏造立事業に行基たちの協力を求めることに国家が方針転換して、行基を大僧正に任ずることになったのだ。こうした行基に対する国家の対応変化の背景にも、都市の自律的展開の姿をみることができるとはのではないだろうか。

のちに平安京は、貴族たちも都市貴族化し、安定した「千年の都」となっていった。もっとも、低湿な地に営まれた右京が早くから衰退し、人々が多く住むことになった左京の方が栄えていったことが、平安貴族の慶滋保胤によって語られている(「池亭記」982年『本朝文粹』)。実際、9世紀には、右京にあった国設市場の西市が、交易の場としての地位を次第に左京の東市に奪われていったことを留めようとする法令がしばしば出されている。しかし、自律的な動きをとるようになった都市の流通展開を押しとどめることは、律令国家にもできなかった。

こうして、平安京は、左京から鴨川の東岸へと都市域を広げ、院政期に白河の都市域ができたり、南に鳥羽の都市域が展開するなど、朱雀大路を中軸に左右対称の都市構成をもつ古代的な都市から変容していったのである。

- <参考文献>
- 1) 佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6 都市社会史』山川出版社 2001年
 - 2) 都市史研究会編『年報都市史研究』山川出版社 2005年
 - 3) 佐藤信編『日本の時代史4 律令国家と天平文化』吉川弘文館 2002年

- <写真提供>
- 写真1 奈良文化財研究所
 写真2 松村憲勇
 写真3、5 国際航業株式会社
 写真4 塚本敏行